

Oracle® Collaboration Suite

Oracle Files 利用ガイド

リリース 2 (9.0.4)

部品番号 : B13929-01

2004 年 6 月

ORACLE®

Oracle Collaboration Suite Oracle Files 利用ガイド、リリース 2 (9.0.4)

部品番号 : B13929-01

原本名 : Oracle Collaboration Suite Using Oracle Files, Release 2 (9.0.4)

原本部品番号 : B10900-02

Copyright © 2003, 2004, Oracle Corporation. All rights reserved.

制限付権利の説明

このプログラム（ソフトウェアおよびドキュメントを含む）には、オラクル社およびその関連会社に所有権のある情報が含まれています。このプログラムの使用または開示は、オラクル社およびその関連会社との契約に記された制約条件に従うものとします。著作権、特許権およびその他の知的財産権と工業所有権に関する法律により保護されています。

独立して作成された他のソフトウェアとの互換性を得るために必要な場合、もしくは法律によって規定される場合を除き、このプログラムのリバース・エンジニアリング、逆アセンブル、逆コンパイル等は禁止されています。

このドキュメントの情報は、予告なしに変更される場合があります。オラクル社およびその関連会社は、このドキュメントに誤りがないことの保証は致しません。これらのプログラムのライセンス契約で許諾されている場合を除き、プログラムを形式、手段（電子的または機械的）、目的に関係なく、複製または転用することはできません。

このプログラムが米国政府機関、もしくは米国政府機関に代わってこのプログラムをライセンスまたは使用する者に提供される場合は、次の注意が適用されます。

U.S. GOVERNMENT RIGHTS

Programs, software, databases, and related documentation and technical data delivered to U.S. Government customers are "commercial computer software" or "commercial technical data" pursuant to the applicable Federal Acquisition Regulation, and agency-specific supplemental regulations. As such, use, duplication, disclosure, modification, and adaptation of the Programs, including documentation and technical data, shall be subject to the licensing restrictions set forth in the applicable Oracle license agreement, and, to the extent applicable, the additional rights set forth in FAR 52.227-19, Commercial Computer Software--Restricted Rights (June 1987). Oracle Corporation, 500 Oracle Parkway, Redwood City, CA 94065.

このプログラムは、核、航空産業、大量輸送、医療あるいはその他の危険が伴うアプリケーションへの用途を目的としておりません。このプログラムをかかる目的で使用する際、上述のアプリケーションを安全に使用するために、適切な安全装置、バックアップ、冗長性（redundancy）、その他の対策を講じることは使用者の責任となります。万一かかるプログラムの使用に起因して損害が発生いたしました、オラクル社およびその関連会社は一切責任を負いかねます。

Oracle は Oracle Corporation およびその関連会社の登録商標です。その他の名称は、Oracle Corporation または各社が所有する商標または登録商標です。

目次

Oracle Collaboration Suite Oracle Files 利用ガイド

1	Oracle Files の管理階層	2
1.1	システム管理者	2
1.2	サイト管理者	2
1.3	サブスクリーバ管理者	2
2	Oracle Files のエンド・ユーザーの概念および機能	3
2.1	ファイル管理	3
2.2	ワークスペース	4
2.3	ごみ箱	5
2.4	検索	5
2.5	ロック	5
2.6	カテゴリ	6
2.7	バージョニング	6
2.8	レビュー・プロセス	7
2.9	インプレース編集	8
2.10	ファイルの同期	8
3	Oracle Files への初めてのログイン	8
3.1	パスワードの変更	9
3.2	パスワードの確認の設定	10
3.3	ページ当たりの表示行数の指定	11
3.4	パブリック・フォルダの有効化または無効化	11
3.5	表示言語の指定	12
3.6	タイムゾーンの指定	12
3.7	クオータおよび記憶域の参照	12
4	業界標準プロトコル・サーバー	13

4.1	Web フォルダによるアクセス	14
4.2	Macintosh クライアント用の AppleTalk Filing Protocol (AFP)	15
4.3	HTTP (Web ブラウザ) および WebDAV アクセス	16
4.4	SMB/NTFS によるアクセス	16
4.5	FTP によるアクセス	17
4.6	NFS (ネットワーク・ファイル・システム) プロトコル	17
5	Oracle FileSync クライアント・ソフトウェア	23
5.1	Oracle FileSync のインストール	23

Oracle Collaboration Suite Oracle Files 利用ガイド

Oracle Files は、エンタープライズ・ファイル・サーバーにかわるものとして設計されており、ユーザーのより生産的な共同作業を実現するコンテンツ管理機能（バージョニングなど）が追加されています。すべてのコンテンツは、Oracle データベースに格納されます。

Oracle Files により、次のものが提供されます。

- ファイル共有プロトコルおよび共同作業プロトコルのサポート。
- 大規模なデプロイメントのために設計された Web ユーザー・インターフェース。
- ワークスペース・ベースの共同作業。
- 拡張可能メタデータ、バージョニングおよびコンテンツ・ベース検索などのコンテンツ管理機能。
- 承認およびルーティングのためのワークフロー統合。
- 単一ファイル・リカバリのためのユーザー・オプションおよび管理者オプション。
- スケーラビリティ、信頼性、セキュリティおよびプラットフォームの独立性。

これらの機能は、ファイル・サーバーの統合によって IT 担当マネージャが経費を削減できるようにすると同時に、従業員の生産性を向上させることを目的として設計されています。

このマニュアルでは、Oracle Files の概念および機能に関する高レベルの概要を説明します。

このマニュアルでは、次の項目について説明します。

- [Oracle Files の管理階層](#)
- [Oracle Files のエンド・ユーザーの概念および機能](#)
- [Oracle Files への初めてのログイン](#)
- [業界標準プロトコル・サーバー](#)
- [Oracle FileSync クライアント・ソフトウェア](#)

1 Oracle Files の管理階層

Oracle Files には、3 つの管理レベルがあります。

関連資料： Oracle Files の管理の詳細は、『Oracle Files 管理者ガイド』を参照してください。

1.1 システム管理者

システム管理者は、Oracle Files ドメインの管理、ドメイン・コントローラ、ノード、サービスおよびサーバーの起動と停止、および信頼性とパフォーマンスを確保するためのシステム・チューニングを担当します。

1.2 サイト管理者

サイト管理者は、Oracle Files のサブスクライバを管理します。1 つのサブスクライバのユーザーが、別のサブスクライバのユーザーのコンテンツにアクセスすることはできません。サイト管理者は、サブスクライバを作成、変更および削除します。サイト管理者は、一般ユーザーとは表示内容が異なる Oracle Files を使用します。

注意： サイト管理者は Oracle Files にシングル・サインオン（SSO）を使用する必要があるため、また、現行の SSO 制限のため、ユーザーが所有できる Oracle Files サブスクライバは 1 つのみです。

1.3 サブスクライバ管理者

Oracle Files では、サブスクライバとは、ユーザーがファイルおよびフォルダで共同作業を行う組織エンティティを示します。各サブスクライバには、それぞれ固有のサブスクライバ管理者が存在します。拡張ユーザーであるサブスクライバ管理者は、割当て制限、ユーザーおよびカテゴリの管理、サブスクライバ設定の指定、アーカイブからのファイルのリストアを行うことで、サブスクライバを管理します。サブスクライバ管理者は、一般ユーザーとは表示内容が異なる Oracle Files を使用します。

2 Oracle Files のエンド・ユーザーの概念および機能

次の項目について説明します。

- ファイル管理
- ワークスペース
- ごみ箱
- 検索
- カテゴリ
- バージョニング
- レビュー・プロセス
- インプレース編集
- ファイルの同期

2.1 ファイル管理

各ユーザーは「マイ・パブリック・ファイル」フォルダを所有します。このフォルダには、すべてのサブスクライバ・ユーザーから参照可能なファイルを格納します。

各ユーザーは「マイ・プライベート・ファイル」フォルダを所有します。このフォルダには、所有者であるユーザーのみがアクセスし、格納と表示を行えるファイルを格納します。

Oracle Files での共同ファイル管理により、ユーザーは次のことを行えます。

- 電子メールにドキュメントを添付するかわりに、ドキュメントのリンクを送信すること。
- 変更をただちに有効にし、ユーザー間で変更の上書きが発生することがないように、ドキュメントの1つのコピー上で共同作業すること
- ワークスペース・メンバーを使用してコンテンツへのアクセスを制御すること

2.1.1 「マイ・パブリック・ファイル」フォルダおよび「マイ・プライベート・ファイル」フォルダのクオータ

ユーザーの「マイ・パブリック・ファイル」フォルダおよび「マイ・プライベート・ファイル」フォルダには、サブスクライバ管理者によって記憶域のクオータが割り当てられます。「ごみ箱」フォルダも含めた各フォルダの内容は、そのフォルダに割り当てられたクオータを使用します。割り当てられたクオータを超過すると、ユーザーはそのフォルダにそれ以上の内容を格納できなくなります。ただし、ユーザーは、サブスクライバ管理者に追加のクオータを要求できます。

関連資料： 詳細は、「Oracle Files オンライン・ヘルプ」の「ファイル管理」を参照してください。

2.2 ワークスペース

ワークスペースは、選択されたグループの Oracle Files ユーザーがファイルおよびフォルダを格納し、共同作業する場所です。ワークスペースのコンテンツは、そのメンバーのみが表示および編集できます。ワークスペースには少なくとも 1 人の管理者が含まれる他、参加者および参照者を含めることができます。

Oracle Files のワークスペース共同作業機能により、ユーザーは次のことを行えます。

- 電子メールにドキュメントを添付するかわりに、ドキュメントのリンクを送信すること。
- 変更がワークスペースの全メンバーに対してただちに表示され、ユーザー間で変更の上書きが発生するこがないように、ドキュメントの 1 つのコピー上で共同作業すること。
- ワークスペース・アクセス・レベルを使用してコンテンツへのアクセスを制御すること。
- ワークスペース・コンテンツを、1 つの場所から別の場所にコピーおよび移動すること。

2.2.1 ワークスペース・アクセス・レベル

ユーザーには、ワークスペースに対する 3 つのレベルのアクセスを割り当てることができます。

- **ワークスペース管理者**：ワークスペース管理者の役割はワークスペースの管理です。管理の役割には、ワークスペース・メンバーの追加と削除、メンバーのアクセス権の変更、追加のワークスペース・クオータの要求、および可視性とワークスペース・タイプの指定などが含まれます。ワークスペース管理者は、ワークスペースのファイルおよびフォルダへの完全なアクセス権を持ち、他のワークスペース・メンバーがロックしたファイルをロック解除できます。
- **参加者**：ワークスペース参加者は、ワークスペースのファイルとフォルダの内容およびプロパティを編集できます。ワークスペース参加者は、ワークスペースから、またはワークスペースへのオブジェクトのコピーや移動ができる他、ワークスペースおよびワークスペースの「ごみ箱」フォルダからファイルやフォルダを削除できます。
- **参照者**：ワークスペース参照者は、ワークスペースのファイルおよびフォルダを参照するだけに限られます。

2.2.2 ワークスペース・クオータ

各ワークスペースには、ワークスペース管理者によって記憶域のクオータが割り当てられます。パブリック・フォルダおよび「ごみ箱」フォルダを含む各ワークスペースのコンテンツは、ワークスペースに割り当てられたクオータを使用します。ワークスペースのクオータを超過すると、ワークスペース・メンバーはそのワークスペースにそれ以上のコンテンツを格納できなくなります。ただし、そのワークスペースの管理者は、サブスクライバ管理者に追加のクオータを要求できます。

関連資料： 詳細は、「Oracle Files オンライン・ヘルプ」の「ワークスペース管理」を参照してください。

2.3 ごみ箱

プライベート・フォルダおよびパブリック・フォルダで削除されたファイルは、個人のごみ箱に移動します。ワークスペースで削除されたファイルは、対応する「ごみ箱」フォルダに移動します。ユーザーは、ごみ箱から削除されたファイルのリストアを、サブスクライバ管理者に要求できます。ごみ箱に移動したコンテンツは、ごみ箱が空になるまでクオータを使用します。

関連資料： 詳細は、「Oracle Files オンライン・ヘルプ」の「ファイル管理」を参照してください。

2.4 検索

ユーザーは、単純な検索または拡張検索を行えます。拡張検索では、検索条件の変更および組合せが可能です。

関連資料： 詳細は、「Oracle Files オンライン・ヘルプ」の「検索オプション」を参照してください。

2.5 ロック

Oracle Files では、3つのレベルのドキュメントのロック機能が提供されます。

- **手動ロック**：ユーザーは Oracle Files の Web ユーザー・インターフェースを使用して、手動でファイルのロックおよびロック解除を行えます。ファイルが手動でロックされた場合、そのファイルの「ステータス」列に「**手動ロック**」アイコンが表示されます。また、ファイルがロック解除されるまで、他のワークスペース・メンバーは、そのファイルに関して読み取り専用のアクセス権しか与えられません。ファイルがロック解除されると、「ステータス」列の「**手動ロック**」アイコンが表示されなくなります。

- **編集のためのロック**：ワークスペース・メンバーが現時点でクライアント・アプリケーション（Microsoft Web フォルダ上の Microsoft Office など）から直接ファイルを編集している場合、そのファイルの「ステータス」列に「編集のためのロック」アイコンが表示されます。ファイルがロック解除されるまで、他のワークスペース・メンバーは、このファイルに関して読み取り専用のアクセス権しか与えられません。ファイルがロック解除されると、「ステータス」列の「編集のためのロック」アイコンが表示されなくなります。
- **レビューのためのロック**：Oracle Files ファイルがレビューのためにレビュー・プロセスに送信されると、そのファイルは Oracle Files によって自動的にロックされます（詳細は、7 ページの「レビュー・プロセス」を参照）。レビューのためにファイルがロックされると、そのファイルの「ステータス」列に「レビューのためのロック」アイコンが表示されます。レビュー・プロセスが完了するとファイルがロック解除され、「ステータス」列の「レビューのためのロック」アイコンが表示されなくなります。

関連資料： 詳細は、「Oracle Files オンライン・ヘルプ」の「ファイル管理」および「レビュー・プロセスと Oracle Workflow」を参照してください。

2.6 カテゴリ

ファイルまたはフォルダにカテゴリを関連付け、カテゴリの属性を変更することで、ユーザーは、ファイルまたはフォルダの情報を整理および分類できます。また、カテゴリおよびカテゴリの属性で、ファイルを検索できます。カテゴリは、Oracle Files のサブスクリーバ管理者によって作成されます。

関連資料： 詳細は、「Oracle Files オンライン・ヘルプ」の「カテゴリ」を参照してください。

2.7 バージョニング

ユーザーは、ファイルの 1 つ以上のスナップショットを作成および保存して、ファイル変更の履歴を保存できます。

関連資料： 詳細は、「Oracle Files オンライン・ヘルプ」の「バージョニング」を参照してください。

2.8 レビュー・プロセス

Oracle Files のレビュー・プロセス機能によって、ユーザーはレビューのためにファイルを送信し、これらのファイルの承認、否認またはレビューを行う他のユーザーを選択できます。

Oracle Files のレビュー・プロセスは、Oracle Workflow を使用して実装されます。ワークスペース・メンバーは、レビュー・プロセスを使用して、ワークスペースの1つ以上のファイルを、レビューのためにそのワークスペースの他のメンバーに送信できます。レビュー・プロセスは、結果としてファイルが承認または否認される以外にも、ファイルの承認または否認に至る前に期限切れになる場合や、キャンセルされる場合があります。メンバーは、レビュー・プロセスの承認者またはレビュアのいずれかになります。

- **承認者**：承認者は、1つ以上のファイルの承認を求める通知を Oracle Workflow から受け取ると、レビューのために送信されたファイルを承認または否認する必要があります。承認者は、1つのレビュー・プロセスに関連付けられた個々のファイルを承認または否認できないため、ファイルを総括して承認または否認する必要があります。レビュー・プロセスを開始したワークスペース・メンバーには、承認または否認が通知されます。
- **レビュア**：レビュアは、1つ以上のファイルのレビューを求める通知を Oracle Workflow から受け取ると、ファイルをレビューできます。レビュアは、レビューのために送信されたファイルを承認または否認できます。

また、レビュー・プロセス中のファイルを自動的に新しい場所に移動またはコピーしたり、自動的にバージョニングされるよう指定できる他、レビュー・プロセス完了時に自動的にファイルが削除されるよう指定できます。

レビュー・プロセスが完了すると、レビュー・プロセスの承認または否認が開始者に通知されます。

2.8.1 カスタム・レビュー・プロセス

サイト管理者は、Oracle Files で使用するためのカスタム・レビュー・プロセス（ワークフロー・プロセスとも呼ぶ）を提供できます。Oracle Workflow Builder を使用したワークフロー・プロセスの設計に必要なスキルを持つワークフロー設計者がカスタム・ワークフロー・プロセスを作成し、サイト管理者がそのワークフロー・プロセスを Oracle Files に登録します。

Oracle Files のレビュー・プロセス機能を使用すると、サイト管理者によって登録されたすべてのカスタム・ワークフロー・プロセスを選択できます。

関連資料： 詳細は、「Oracle Files オンライン・ヘルプ」の「レビュー・プロセスと Oracle Workflow」を参照してください。

2.9 インプレース編集

Microsoft Web フォルダを使用した場合、ユーザーは Oracle Files ファイルを開いて編集し、行った変更を直接 Oracle Files に保存できます。ユーザーが Microsoft Web フォルダからファイルを開いて Microsoft Office で編集すると、ファイルは自動的に Oracle Files でロックされます。ファイルへのすべての変更は、自動的に Oracle Files に保存されます。ユーザーが Microsoft Office でファイルを閉じると、ファイルは自動的に Oracle Files でロック解除されます。Web フォルダの設定の詳細は、14 ページの「[Web フォルダによるアクセス](#)」を参照してください。

関連資料： 詳細は、「Oracle Files オンライン・ヘルプ」の「ファイル管理」を参照してください。

2.10 ファイルの同期

OracleFileSync は、選択されたローカル・フォルダとリモート・フォルダの内容を一致させるために、ローカル・マシンと Oracle Files の間のすべてのファイル変更を同期します。

OracleFileSync のインストール方法は、23 ページの「[OracleFileSync のインストール](#)」を参照してください。OracleFileSync をインストールした後は、このアプリケーションのオンライン・ヘルプにより、ローカル・フォルダとリモート・フォルダの同期に関する詳細な説明が提供されます。

3 Oracle Files への初めてのログイン

Oracle Files に初めてログインする場合、「一般ユーザー設定」ページが表示されます。このページで、Oracle Files での作業方法のカスタマイズを開始できます。

初めてログインする際には、次の作業を設定できます。

- [パスワードの変更](#)
- [パスワードの確認の設定](#)
- [ページ当たりの表示行数の指定](#)
- [パブリック・フォルダの有効化または無効化](#)
- [表示言語の指定](#)
- [タイムゾーンの指定](#)
- [クオータおよび記憶域の参照](#)

3.1 パスワードの変更

Oracle Files で使用するパスワードは 2 つあります。シングル・サインオン (SSO) のパスワードおよび Files 固有のパスワードです。

シングル・サインオンのパスワードは、同じ SSO Server を使用するすべての Oracle アプリケーションで使用できます。そのため、SSO に一度ログインすると、シングル・サインオンを使用する各 Oracle アプリケーションにログインされた状態になります。

Files 固有のパスワードは Oracle Files のみで使用されます。このパスワードでは、FTP や AFP などのプロトコルを介して Oracle Files のコンテンツにアクセスできます。Files 固有のパスワードを使用するプロトコルは、Oracle Files のシステム管理者によって指定されます。

3.1.1 シングル・サインオンのパスワードの変更

1. Oracle Files の任意の場所から 「設定」 をクリックします。
「一般ユーザー設定」 ページが表示されます。
2. 「パスワード」 をクリックします。
「パスワード・ユーザー設定」 ページが表示されます。
3. 「シングル・サインオンのパスワード変更」 をクリックします。
4. 既存のシングル・サインオンのパスワードを入力し、新しいシングル・サインオンのパスワードを入力して確認します。
5. 「適用」 をクリックして変更を受け入れ、「パスワード・ユーザー設定」 ページでの作業を続行します。

3.1.2 Files 固有のパスワードの変更

1. Oracle Files の任意の場所から 「設定」 をクリックします。
「一般ユーザー設定」 ページが表示されます。
2. 「パスワード」 をクリックします。
「パスワード・ユーザー設定」 ページが表示されます。
3. 既存の Files 固有のパスワードを入力し、新しい Files 固有のパスワードを入力して確認します。
4. 「適用」 をクリックして変更を受け入れ、「一般ユーザー設定」 ページでの作業を続行します。

3.2 パスワードの確認の設定

Microsoft Web フォルダでパスワードが確認される間隔は、サブスクライバ管理者が指定します。ただし、サブスクライバ管理者は、ユーザーが独自のパスワード確認を「ユーザー設定」で設定するオプションを提供できます。

注意: このオプションが正しく機能するためには、使用するブラウザで Cookie を有効にする必要があります。詳細は、「Oracle Files オンライン・ヘルプ」の「設定」を参照してください。

Microsoft Web フォルダで Oracle Files によってパスワードが確認される間隔を指定するには、次のようにします。

1. Oracle Files の任意の場所から「**設定**」をクリックします。
「一般ユーザー設定」ページが表示されます。
2. 「**パスワード**」をクリックします。
「パスワード・ユーザー設定」ページが表示されます。
3. 「**パスワードの確認**」ドロップダウン・リストから、Microsoft Web フォルダでパスワードが確認される間隔を選択します。選択肢は次のとおりです。
 - 1か月に1回
 - 1週間に1回
 - 1日に1回
 - 8時間ごと
 - 4時間ごと
 - 常に
4. 「**適用**」をクリックして変更を受け入れ、「一般ユーザー設定」ページでの作業を続行します。

3.3 ページ当たりの表示行数の指定

Oracle Files で作業を続けるうちに、フォルダの内容は増えていきます。各ユーザーが必要性に応じてオブジェクト（ファイルおよびフォルダ）のリストを表示できるように、Oracle Files では、各「ファイルの参照」ページに表示するオブジェクト（ファイルおよびフォルダ）の数を指定できます。

「ファイルの参照」ページに表示されるオブジェクトの数を指定するには、次のようにします。

1. Oracle Files の任意の場所から **「設定」** をクリックします。

「一般ユーザー設定」ページが表示されます。

2. 「ページあたりの表示行数」フィールドに、各「ファイルの参照」ページで表示するオブジェクト（ファイルおよびフォルダ）の数を入力します。

範囲を指定する際には、画面のサイズおよび長いリストをスクロールする手間を考慮してください。各ページに表示されるオブジェクトの数を制限した方が、操作しやすい場合もあります。

3. 「適用」をクリックして変更を受け入れ、「一般ユーザー設定」ページでの作業を続行します。

3.4 パブリック・フォルダの有効化または無効化

サブスクライバのデフォルト設定によって、パブリック・フォルダを有効または無効にできます。このオプションが有効になっている場合、パブリック・フォルダにファイルおよびフォルダを格納できます。これにより、同じサブスクライバの他のユーザーが、「すべてのパブリック・ファイル」からこれらのファイルおよびフォルダを参照できるようになります。サブスクライバ管理者がこのオプションを無効にしている場合、パブリック・フォルダを有効または無効にはできません。ただし、サブスクライバ管理者にこの設定の変更を要求することはできます。

パブリック・フォルダの設定を変更するには、次のようにします。

1. Oracle Files の任意の場所から **「設定」** をクリックします。

「一般ユーザー設定」ページが表示されます。

2. **「拡張」** をクリックします。

「拡張ユーザー設定」ページが表示されます。

3. パブリック・フォルダ・セクションで「**オン**」を選択してフォルダを表示するか、「**オフ**」を選択してフォルダを非表示にします。

注意： パブリック・フォルダを無効にすると、「すべてのパブリック・ファイル」からそのパブリック・フォルダが削除されます。パブリック・フォルダが「すべてのパブリック・ファイル」に表示されなくなるため、そのパブリック・フォルダにファイルを格納できなくなります。

パブリック・フォルダにファイルが格納されている場合は、「無効」オプションを使用できません。パブリック・フォルダを無効にするには、フォルダからすべての内容を削除する必要があります。

4. 「適用」をクリックして変更を受け入れ、「一般ユーザー設定」ページでの作業を続行します。

3.5 表示言語の指定

表示言語を指定するには、次のようにします。

1. Oracle Files の任意の場所から「設定」をクリックします。
2. 「一般ユーザー設定」ページの「表示言語」ドロップダウン・リストから、言語を選択します。
3. 「適用」をクリックして変更を受け入れ、「一般ユーザー設定」ページでの作業を続行します。

3.6 タイムゾーンの指定

タイムゾーンを指定することで、適切なタイムスタンプをファイルに適用できます。出張中は、場所に基づいてタイムゾーンをリセットできます。

1. Oracle Files の任意の場所から「設定」をクリックします。
「一般ユーザー設定」ページが表示されます。
2. 「タイムゾーン」ドロップダウン・リストからタイムゾーンを選択します。
3. 「適用」をクリックして変更を受け入れ、「一般ユーザー設定」ページでの作業を続行します。

3.7 クオータおよび記憶域の参照

「一般ユーザー設定」ページの「クオータ使用率」フィールドで、クオータの使用状況および記憶域のレベルを参照できます。

クオータは、Oracle Files での記憶域の使用状況の測定値です。この測定値は、クオータのパーセント、および合計記憶域クオータと比較した使用記憶域の量で示されます。

4 業界標準プロトコル・サーバー

Oracle Files は、次のような様々なプロトコル・サーバー実装によって、プロトコルを幅広くサポートしています。

- Web フォルダは、Oracle Files ユーザーにとって最も一般的なプロトコル・アクセスの 1 つです。
- AFP (AppleTalk Filing Protocol) では、Macintosh ユーザーは AppleShare であるかのように Oracle Files を使用できます。MacOS X 以上では TCP 上での AFP がサポートされているため、基礎となる転送として TCP/IP を使用するインターネットおよびネットワーク上で、AFP サービスが使用できます。
- HTTP (Hypertext Transfer Protocol) は、Web ブラウザ・ベースのアクセスに使用します。HTTP は、インターネットなどの Wide Area Network 用に設計されたプロトコルである WebDAV を使用して拡張されています。現在最も広く知られている WebDAV クライアントは、Windows エクスプローラの Web フォルダ拡張機能です。これは、Windows 2000/XP のネットワーク・プレースとして知られています。Web フォルダの設定方法は、14 ページの [「Web フォルダによるアクセス」](#) を参照してください。
- SMB (Server Message Block プロトコル) では、Oracle Files をネットワーク・ドライブとしてマップするか、ネットワーク・コンピュータを介して参照できます。

注意： Oracle Files が UNIX または Linux で実行されている場合、SMB プロトコルのサポートは Oracle Files SMB サーバーによって提供されます。Oracle Files が Windows で実行されている場合は、Windows と UNIX ではアーキテクチャが異なるため、SMB プロトコルのサポートは Oracle Files NTFS サーバーによって提供されます。

- Windows NT および Windows 2000 用の NTFS (NT File System) では、ローカル・ドライブをサーバー・マシンの Oracle Files リポジトリにマップできます。
- FTP (ファイル転送プロトコル) は、インターネットなどの Wide Area Network 経由でファイルを転送する場合に使用します。
- NFS (ネットワーク・ファイル・システム) は、UNIX プラットフォーム上のリモート・ファイル・システムをマウントするためのメカニズムです。

ユーザーは、プラットフォームに適したプロトコルを使用して、Oracle Files に接続できます。たとえば、Mac ユーザーは、AppleShare サーバーであるかのように Oracle Files に接続できます。Windows ユーザーは、ネットワーク・ドライブをマップするか、Web フォルダを使用して接続できます。UNIX クライアントは、NFS を使用して接続できます。

注意： FTP、 AFPなどの一部のプロトコルは、暗号化されていないパスワードをネットワーク上で送信します。Oracle Internet Directory ユーザーは、セキュリティを強化するために、これらのプロトコルに対して Oracle Files 固有のパスワードを使用する必要があります。

NFS、NTFS および SMB プロトコルでは、バージョニングされたドキュメントは読み取り専用モードでオープンされ、削除、移動、名前の変更をできないという制限が適用されます。これは、一部のアプリケーション（Microsoft Office アプリケーションなど）では、ファイルを保存するために、まずデータを一時ファイルに保存し、元のファイルを削除した後、一時ファイルの名前を元のファイルの名前に変更するためです。ドキュメントをバージョニングした結果、前のバージョンが失われます。

次の項では、Oracle Files へのクライアント・アクセスに関する追加情報を示します。

- [Web フォルダによるアクセス](#)
- [Macintosh クライアント用の AppleTalk Filing Protocol \(AFP\)](#)
- [HTTP \(Web ブラウザ\) および WebDAV アクセス](#)
- [SMB/NTFS によるアクセス](#)
- [FTP によるアクセス](#)
- [NFS \(ネットワーク・ファイル・システム\) プロトコル](#)

4.1 Web フォルダによるアクセス

Web フォルダは、Oracle Files ユーザーにとって最も一般的なプロトコル・アクセスの1つです。Web フォルダを使用した Oracle Files へのアクセスを設定するには、次のタスクを実行します。

4.1.1 Web フォルダのインストール (必要な場合)

Web フォルダをインストールするには、次のようにします。

注意： Web フォルダの機能は、Microsoft Windows 2000 および Microsoft Windows XP とともに自動的にインストールされます。

1. 「スタート」→「設定」→「コントロールパネル」の順にクリックしてコントロール・パネルを開きます。
2. 「アプリケーションの追加と削除」を選択します。

3. 「Internet Explorer」を選択し、「変更と削除」をクリックします。
4. 「コンポーネントを追加する」を選択します。
5. 「OK」をクリックします。
6. コンポーネントのリストをスクロールし、「Web フォルダ」を選択します。
7. Windows Update プロセスを完了します。

4.1.2 Web フォルダの設定

Web フォルダを設定するには、次のようにします。

1. Windows NT の場合は、Windows エクスプローラを開きます。
Windows 2000/XP の場合は、「マイ ネットワーク」を開きます。
2. Windows NT の場合は、「Web フォルダ」フォルダを開き、「Web フォルダの追加」をダブルクリックします。
Windows 2000/XP の場合は、「ネットワーク プlaces の追加」をダブルクリックします。
3. ウィザードの指示に従います。
URL を次の形式で指定します。
`http://fileserver.mycompany.com/content`
4. 接続されたら、ユーザー名とパスワードを入力し、Web フォルダの名前を指定します。
Web フォルダの設定が完了すると、Oracle Files の Web フォルダが「Web フォルダ」フォルダまたは「ネットワーク プlaces」フォルダに表示されます。

4.2 Macintosh クライアント用の AppleTalk Filing Protocol (AFP)

Oracle Files には、 AFP 2.2 準拠の AppleTalk Filing Protocol (AFP) サーバーが含まれています。MacOS X クライアントは、 AFP サーバーを AppleShare サーバーであるかのように使用できます。 AFP サーバーへの接続に必要な手順は、クライアントの MacOS によって異なります。 MacOS X クライアントは、デスクトップから「Go」メニューを使用します。 次に、 詳細を説明します。

MacOS X にはセレクタは存在しません。 クライアントは、新しい「Go」メニューを使用して接続する必要があります。 次に、その手順を示します。

1. メニューから「Go」を選択します。
2. 「Connect to Server」を選択します。 ダイアログ・ボックスが表示されます。

3. URL 形式で、 AFP サーバーを実行している Oracle Files 中間層コンピュータのアドレスを入力します。

`afp://computer_name`

AppleShare アイコンがクライアントのデスクトップに表示されます。

4.3 HTTP (Web ブラウザ) および WebDAV アクセス

UNIX または Windows NT/2000 サーバー・プラットフォームで HTTP、WebDAV および OracleFileSync を使用して Oracle Files にアクセスするには、次の URL を使用します。

`http://server_name:7778/files/content`

注意: ポート番号は、Web Cache が構成されているかどうかによって異なります。Web Cache が構成されている場合、通常、UNIX クライアントの値は 7777 で、Windows クライアントの値は 80 です。Windows XP クライアントで WebDAV を使用して Oracle Files にアクセスする場合は、URL でポートに 80 を指定します。

この URL は、次のものからアクセスする場合に必要です。

- Web ブラウザ
- Web フォルダなどの DAV アプリケーション
- OracleFileSync ユーティリティ

4.4 SMB/NTFS によるアクセス

SMB (Server Message Block プロトコル) では、Oracle Files をネットワーク・ドライブとしてマップするか、ネットワーク・コンピュータを介して参照できます。

Oracle Files が UNIX または Linux で実行されている場合、SMB プロトコルのサポートは Oracle Files サーバーによって提供されます。Oracle Files が Windows で実行されている場合は、Windows と UNIX でアーキテクチャが異なるため、SMB プロトコルのサポートは Oracle Files NTFS サーバーによって提供されます。

SMB/NTFS アクセスでは、次の制限が適用されます。

- ディレクトリをマップするには、構文 `\servername\myhome` または `\servername\allpublic` を使用します。
- 接続時に既存の Oracle Files ユーザー名およびパスワードを使用します。

- 同じサーバーのフォルダに異なるユーザーとして複数の SMB/NTFS マッピングを行うことはできません。

これは、Windows オペレーティング・システムの制限です。

詳細は、『Oracle Files 管理者ガイド』およびオペレーティング・システムのドキュメントを参照してください。

4.5 FTP によるアクセス

FTP（ファイル転送プロトコル）は、インターネットなどの Wide Area Network 経由でファイルを転送する場合に使用します。

最も軽量のプロトコルである FTP は、他のプロトコルより高速に大量のデータを移動できます。バルク操作（既存のシステムからの移行など）の場合は、FTP を使用することをお薦めします。この手順では、コマンドライン FTP または GUI FTP クライアントのいずれかを使用する必要があります。

FTP を使用して Oracle Files にファイルを転送するには、次の要件が満たされている必要があります。

- FTP クライアントがローカル・コンピュータにインストールされている。
- Oracle Files 構成時に指定した FTP 用のポート番号がわかっている。
- Oracle Files サーバーのアカウントがすでに存在している。

4.6 NFS（ネットワーク・ファイル・システム）プロトコル

Oracle Files では、次に示す NFS クライアントでの使用が保証されている NFS プロトコル・サーバーが提供されます。

- Solaris 2.8 および Solaris 2.9
- Red Hat Linux Adv. Server 2.1（カーネル 2.4.9-e.16）
- Hummingbird Maestro NFS を使用する Windows NT および 2000 クライアント

Oracle Files NFS サーバーがプライマリ NFS サーバーとして構成されている場合、UNIX クライアント（Solaris 2.8、Solaris 2.9 および Red Hat Linux Adv. Server 2.1）は、標準の NFS マウント・コマンド（表 1 を参照）を使用してサーバーにアクセスできます。

表 1 NFS サーバー（プライマリ NFS サーバーとして構成済）のマウント

構文	例
<code>mount host:files.pathname mount_point</code>	<code>mount fileserv:home /data/files</code>

Oracle Files NFS サーバーがセカンダリ NFS サーバーとして構成されている場合または Oracle Files NFS サーバーが標準のポート番号に存在しない場合、Solaris クライアントでは public オプションを指定し、Linux クライアントではマウント・ポートを指定する必要があります。詳細は、19 ページの「[Solaris 2.8 および Solaris 2.9 クライアント](#)」および 19 ページの「[Red Hat Linux Adv. Server 2.1 および Red Hat Linux 8.0 クライアント](#)」を参照してください。

Hummingbird Maestro クライアントには、その他の注意事項が適用されます。詳細は、20 ページの「[NFS Maestro ネットワーク・アクセス・ツールを使用した NFS ディレクトリのリンク](#)」を参照してください。

4.6.1 NFS サーバーの制限

システム固有の UNIX NFS で使用されるパーティション・モード・ビットは、Oracle Files NFS プロトコル・サーバーでは使用されません。かわりに、Oracle Files NFS では、他のプロトコル・サーバーと同様に、アクセスの制御にアクセス制御リスト（ACL）が使用されます。

また、Oracle Files NFS サーバーでは次のものはサポートされません。

- UNIX のシンボリック・リンクおよびハード・リンク
- UNIX の chown、chgrp および chmod コマンド
ファイルの所有者およびアクセス制御リストを変更するには、コマンドライン・ユーティリティを使用します。
- UNIX ロック・マネージャ

Oracle Files NFS サーバーによって戻されるハンドルは UNIX ロック・マネージャと互換性がありません。UNIX ロック・マネージャ・サービスを必要とするアプリケーションは、Oracle Files NFS サーバーとともに動作しません。

NFS クライアントは、バージョニングされたドキュメントのチェックアウト・バージョンにはアクセスできません。競合が発生する可能性を回避するために、Oracle Files NFS サーバーでは、NFS クライアントによる、バージョニングされたドキュメントのチェックアウト・バージョンへのアクセスは許可されていません。

バージョニングされたドキュメントは、削除、移動または名前の変更ができません。一部のアプリケーション（Microsoft Office アプリケーションなど）では、ファイルを保存するために、まずデータを一時ファイルに保存し、元のファイルを削除した後、一時ファイルの名前を元のファイルの名前に変更します。ドキュメントをバージョニングした結果、前のバージョンが失われます。

4.6.2 Solaris 2.8 および Solaris 2.9 クライアント

Oracle Files NFS サーバーがホスト上でプライマリ NFS サーバーとして実行されている場合、ユーザーは、標準のマウント・コマンド（表 1 を参照）を入力できます。Oracle Files NFS サーバーがホスト上でセカンダリ NFS サーバーとして実行されている場合、ユーザーは、マウント・コマンドにポート番号を明示的に指定する必要があります。

```
mount nfs://host:port/files_pathname /mount_point
```

次に、例を示します。

```
mount nfs://fileserver:2049/home data/files
```

また、次のコマンドを使用することもできます。

```
mount -o port=port,public host:files_pathname mount_point
```

次に、例を示します。

```
mount -o port=2049,public fileserver:home /data/files
```

4.6.3 Red Hat Linux Adv. Server 2.1 および Red Hat Linux 8.0 クライアント

Oracle Files NFS サーバーがホスト上でプライマリ NFS サーバーとして実行されている場合、ユーザーは、標準のマウント・コマンド（表 1 を参照）を入力できます。Oracle Files NFS サーバーがホスト上でセカンダリ NFS サーバーとして実行されている場合、ユーザーは、マウント・コマンドにポート番号を明示的に指定する必要があります。

```
mount -o port=port,mountport=portno1 host:files_pathname mount_point
```

次に、例を示します。

```
mount -o port=2049, mountport=4048 fileserver:home /data/files
```

4.6.4 Windows クライアント

NFS へのクライアント・アクセスは、すべての UNIX オペレーティング・システムで可能ですが、Windows システムでは追加のクライアント・ソフトウェアが必要です。

Hummingbird Maestro NFS は、Oracle Files NFS サーバーでの使用が保証されている Windows クライアントです。

- Oracle Files NFS サーバーに接続する Windows 2000 ユーザーは、Hummingbird Maestro NFS 7.0 を使用する必要があります。
- Oracle Files NFS サーバーに接続する Windows NT ユーザーは、Hummingbird Maestro NFS 6.0 以上を使用できます。

Oracle Files でサポートされている他の NFS クライアント・アプリケーションおよびバージョン番号については、Oracle Collaboration Suite のリリース・ノートを参照してください。

注意： NFS クライアント用の Windows クライアント・ネットワーク構成では、完全修飾されたホスト名 (hostname.yourcompany.com) を入力します。NFS クライアントをリストの最上位（複数の NFS クライアントをインストールしている場合はネットワーク・コントロール・パネルのネットワーク・アクセス）に移動して、そのドライバが接続に使用されるようにします。

4.6.4.1 NFS Maestro ネットワーク・アクセス・ツールを使用した NFS ディレクトリのリンク

Hummingbird NFS Maestro クライアントを使用して Oracle Files NFS サーバーにアクセスする前に、NFS Maestro クライアントが適切に構成されていることを確認します。

1. NFS Maestro フォルダから、NFS ネットワーク・アクセス・ツールを起動します。「NFS Network Access」ダイアログ・ボックスが表示されます。
2. Oracle Files NFS サーバーのホスト名およびパス名を、「Network Path」フィールドに次の形式で入力します。
\\hostname\pathname
3. 「Authentication Details」領域に、Oracle Files NFS サーバーにアクセスするための UNIX ユーザー名およびパスワードを入力します。「**System/UNIX Authentication**」を認証プロトコルとして選択します。
4. その他に次の値を設定します。
 - **DOS-style sharing:** NFS サーバー・コンピュータで HCLNFSD デーモンを実行していないいかぎり、「DOS-style file sharing」の選択は解除します。DOS スタイル・ファイル共有には、HCLNFSD が必要です。HCLNFSD デーモンが NFS サーバーで実行されていない場合は、ファイルにアクセスする場合の応答時間が非常に長くなります。
 - **UNIX lock manager:** 選択されている場合は選択を解除します。Oracle Files NFS サーバーは UNIX ロック・マネージャと互換性がありません。
 - **CD-ROM:** このボックスが選択されている場合は選択を解除します。これは、CD-ROM または他の読み取り専用ファイル・システムで使用されます。
5. 「Advanced」をクリックして、「Advanced Connection Properties」ダイアログ・ボックスを表示します。
6. 「Preserve Case for Filename Case」を選択します。
7. Oracle Files NFS サーバーがセカンダリ NFS サーバーとして実行されている場合は、「**NFS Port number**」の値を標準のポート（2049）から Oracle Files NFS サーバーが実行されている代替ポート番号に変更します。

8. NFS サーバーへの接続に UDP ではなく TCP を使用するには、「**Use TCP**」選択します。

TCP では、標準の NFS ポート 2049 が使用されます。Oracle Files NFS サーバーが代替ポートで実行されている場合、このボックスは選択しないでください。

4.6.4.2 コマンドラインを使用した NFS ディレクトリのリンク Oracle Files NFS サーバーがホストのプライマリ NFS サーバーである場合は、次の Maestro コマンドライン構文を使用して Oracle Files をマウントできます。

```
nfs link drive: \\host\pathname username
```

次に、例を示します。

```
nfs link n: \\ifsserver\home scott
```

Oracle Files NFS サーバーがホストのセカンダリ NFS サーバーである場合は、コマンドラインで Oracle Files NFS サーバーのポート番号を指定する必要があります。

```
nfs link drive: \\host\pathname username /n:port
```

次に、例を示します。

```
nfs link n: \\ifsserver\home scott /n:4049.
```

[表 2](#) に示すオプションを指定しないかぎり、`nfs link` コマンドでは、NFS Maestro クライアント用に構成されたデフォルトの値が使用されます。

表 2 Maestro コマンドライン・オプション

オプション	意味	使用上の注意
/L:s	DOS スタイル共有を使用。	HCLNFSD デーモンがサーバーで実行されている必要があります。
/L:	ロックを無効化。	HCLNFSD デーモンがサーバーで実行されていない場合にこのパラメータを使用します。
/M:p	ファイル名の大 / 小文字を保持。	
/A:u	システム /UNIX 認証を使用。	常に、この設定を使用します。
/T	UDP 接続ではなく TCP 接続を使用（オプション）。	TCP では、常に、ポート 2049 が使用されます。Oracle Files NFS サーバーがポート 2049（デフォルト）で実行されないかぎり、このオプションは使用しないでください。

不適切なポート番号によって、問題が発生する場合があります。HCLNFSD デーモンが NFS サーバーで実行されていない場合は、DOS スタイルのロックおよび共有をクライアントで無効にする必要があります。

4.6.4.3 Maestro エラー・メッセージ 表3に、一般的なエラー・メッセージおよびMaestro クライアントのその他の問題を示します。

表3 Maestro エラー・メッセージ

問題	処置
「Access denied by server」メッセージ	Oracle Files NFS サーバーに正しいポート番号が使用されていることを確認してください。 TCP 接続では、標準の NFS ポート（2049）が使用されます。Oracle Files NFS サーバーが代替ポートで実行されている場合、このオプションは使用しないでください。
「認証エラー」メッセージ	ユーザー名およびパスワードが無効です。認証サーバーで有効な UNIX ユーザー名およびパスワードを指定してください。
「Bad Network Name」メッセージ	ホスト名およびパス名が正しく指定されていることを確認してください。正しく設定されている場合は、Maestro Rpcinfo ツールを使用し、ホストで NFS サーバー（プロセス番号 100003）が実行されていることを確認してください。
Maestro クライアントがハングしているように見える	HCLNFSD デーモンがサーバー・コンピュータで実行されていることを確認してください。実行されていない場合は、デーモンを起動する（可能な場合）か、または Maestro クライアント設定で「DOS-style sharing」および「UNIX lock manager」の選択が解除されていることを確認してください。
「Network Timeout or HCLNFSD/PCNFSD not running on Host」メッセージ	Maestro コマンドラインでは、リンクしてロックを無効化する場合、/L: コマンドライン・オプションを指定してください。Maestro の nfs use コマンドを使用すると、マップされたすべての現行ドライブを確認できます。
nfs link コマンドがハングする	デフォルトの認証サーバーが NFS クライアントに正しく構成されていることを確認してください。HCLNFSD デーモンが実行されていることを確認してください。「Bad Network Name」メッセージで示した確認を実行してください。
「NFS service not responding」エラー・メッセージ	正しいホスト名およびポート番号が指定されていること、および Oracle Files NFS サーバーが実行されていることを確認してください。
「Permission denied」エラー・メッセージ	ホスト名およびパス名が正しく指定されていることを確認してください。Oracle Files NFS サーバーにポートが正しく指定されていることを確認してください。

5 Oracle FileSync クライアント・ソフトウェア

Windows オペレーティング・システム固有のネットワーキング・プロトコルまたはクライアント・アプリケーションを使用する他に、Windows ユーザーは Oracle FileSync をインストールして使用し、デスクトップ・マシンのローカル・ディレクトリと Oracle Files のフォルダを常に同期させることができます。

5.1 Oracle FileSync のインストール

Oracle FileSync は、ユーザーが使用するローカル・マシンと Oracle Files の間でファイルを常に同期させるための Windows クライアント・アプリケーションです。Oracle FileSync をインストールするには、次のようにします。

1. すべての Windows アプリケーションを保存し、終了します。

以前のリリースの Oracle FileSync ソフトウェアがインストールされている場合は、コントロール・パネルの「**アプリケーションの追加と削除**」を使用して、必ず最初にこのソフトウェアを削除してください。

2. Oracle Files にログインし、「ヘルプ」をクリックします。
3. オンライン・ヘルプのメイン・ページが表示されます。
4. 「Oracle FileSync」セクションのリンクをクリックします。
5. インストール実行可能ファイルを、使用するハード・ドライブに保存します。
6. `FileSync.exe` をダブルクリックし、インストール・プログラムを実行します。
7. 指示に従ってデフォルト値を受け入れます。アプリケーションが、Windows クライアント・マシンの次のディレクトリにインストールされます。

`c:\¥Program Files¥Oracle¥Oracle 9iFS FileSync`

8. Windows の「スタート」→「プログラム」メニューから「**Oracle FileSync**」を選択して、Oracle FileSync アプリケーションを起動します。

